

「日本コエンザイムQ協会」が発足

食品素材の普及と研究を推進

人間の体内で合成される補酵素で、栄養素材として関心が高まっているコエンザイムQについて、その正しい知識の普及啓発・科学研究の奨励・研究会開催及び情報発信等を目的に、一日付で「日本コエンザイム



山本理事長

Q協会」が設立された。理事長には山本順寛氏（東大大学院工学系研究科化学生命工学専攻助教授）、副理事長には紀氏健雄氏（神戸学院大薬学部長・生物化学）が就任した。

コエンザイムQは人間のエネルギー産生に不可欠な成分であり、ミトコンドリア以外の生体膜やリポタンパク質中にも存在し、第一線の抗酸化物質として作用していると考えられている。生体にとって非常に大切な成分であるが、加齢とともに

に細胞内濃度が減少してしまうのも特徴。欧米ではコエンザイムQをサプリメントとして補ったり、化粧品への応用が活発である。

日本では一九七四年以来、うつ血性心不全の治療薬として使われてきたが、昨年春の食薬区分改正によってサプリメントとしての商品開発が進んできた。また現在も漢方という補剤として治療現場で活用する医師も多いという。栄養補助食品としては特にコエンザイムQ10（別名

コキキョーテン、ユビデカレノン、ピタミンQなど。人間にとって重要なコエンザイムQの側鎖のイソプレノイド単位が一〇個のもの）を配合した製品が鐘淵化学、キリン・アスプロ、小林製薬、佐藤製薬、スリーエーカルシウム、DH C、日清ファルマ、三井物産、ファンケルなど各社から発売され人気が高まり、市場も拡大している。

同協会の山本理事長ら役員は六日に都内で会見し、「現在、コエンザイムQの量産化に成功しているのは日本の四社のみで、まさに日本発の重要な物質でもある。加齢に伴う障害を防ぎ、非常に安全性も高い。協会として、高齢化社会の

切り札」と位置づけ、今後は摂取量、代謝物の生理活性、運動能力の向上、神経疾患への効果などの課題を検討していきたい」としている。なお来年二月に予定される総会で、具体的な活動指針及び各種発表を示していくという。

協会事務局は東京都千代田区一番町23の3（アイ・エス・エスコベンション事業部内、☎03・32230・4433）